

## 浄土宗（玉桂寺旧蔵）阿弥陀如来像と その像内納入品の研究のために —— 関連書誌および結縁交名比定・論及一覧 ——

杉崎貴英

表題に掲げた尊像（国指定重要文化財、像高九九・〇センチ、以下「本像」と略記する）は、一九七四年に滋賀県の玉桂寺（真言宗、甲賀市〔旧信楽町〕境内の地藏堂脇壇から見いだされ、仏師快慶（？）一三七以前）の作風を反映する作品として、初めて文化的／美術史の見地から評価されたものである。その五年後には解体修理がおこなわれ、大量の像内納入品が発見された。それにより、法然（一一三三～一二二二）の高弟である源智（一一八三～一二三九）が師の一周忌を期して造立したことが判明し、以来、浄土宗から多大な関心が寄せられてきた。そして二〇一〇年に至り、玉桂寺から浄土宗に所蔵者変更がなされることが決まった。翌年一月二十五日には、法然の八〇〇年遠忌に際し、知恩院御影堂において「源智上人造立阿弥陀如来立像請求法要」が勤修されている。

【表1】にまとめたように、像内納入品の内訳は、建暦二年（一二二二）の年記を含む源智自筆の造立願文のほかは、源智が願文で「数万人の姓名」と記す結縁交名が大部分を占める。その全体像は、仏教史研究の立場から編まれた『玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書調査報告書』（一九八一年、以下『報告書』、全二七〇頁）、および近年に美術史研究の立場から編まれた『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』一（二〇〇四年、以下『集成』）で翻刻・公刊がなされている。後者には他に基準事例三六件の基礎的データとともに収録されているのだが、解説の巻の約三八〇頁のうち実に一二〇頁が本像のデータに当てられており、この結縁交名の破格の多さがよくわかるというものだろう。

筆者はかねてこの像と納入品に関心を抱き、史料としての活用も試みてきたのであるが、これまでなされてきた論及の全体像をとらえてみたく思い、文献の収集を試みてきた。それらは美術史あるいは宗教史さらに社会史研究などに及ぶ人文科学の諸領域からなされており、その広がりや厚みは、正治元年（一一九九）の像内納入品を擁する峰定寺釈迦如来像（重要文化財）などとともに

に、中世の仏像をめぐる学際的アプローチの好例と感じられたからである。そこで同様の関心から先にまとめた「峰定寺釈迦如来像の研究史」（本誌一五号、二〇一一年）において峰定寺像と「好一對と称しうるのではないか」と述べ、その註記では「旧玉桂寺像についての研究史叙述を別途準備している」とも予告しておいたのであった。

ようやくその機を得たのが本稿という次第であるが、当初予定していた研究史的叙述はあえて控え、【表2】として文献目録の提示にとどめることとした。紙幅の制約もさることながら、既往の論及は浄土宗史や列島各地の地域史さらにはアイヌ史にまで及ぶ多彩さであり、それ故に筆者の未消化が痛感されたためでもある。しかし今回までに筆者が確認しえた論及の数多さと多様さは、各種の文献データベースの類によって直ちに把握できるようなものでは到底ない。また『集成』において、参考文献欄での書誌の掲出が六件にとどめられていることも鑑みれば——無論それも紙幅の制約故のことであろうが——、こうしたかたちで書誌を提示し、今後の調査研究のため情報の共有化をはかる意義はあるというものだろう。作成にあたっては関連事項の年表的掲出を兼ね、また事典項目や些細な言及にとどまるもの、さらに現代の浄土宗での宗教活動における言及などもあえて登載した。もって本像をめぐる関心が研究という範疇のみにとどまらない広がり呈している状況を表示できればと思うが故である。

また【表3】として、納入品に所見する人名に対して従来なされてきた比定や論及の一覧化を試みた。もとより中世史料に所見する人名の比定については、同名であっても別人の可能性が考慮されるべきであり、既往の見解のなかには筆者も疑問を禁じえないものが散見される。しかし今回はあえて取捨選択を行わなかった。研究の現況をありのままに表示したいと思うが故である。

なお【表3】では、『報告書』と『集成』での該当ページを併記した。先行研究において言及された個々の結縁者名を『集成』の紙面に見出すのは、なかなか困難だからである。両書について大学図書館および公共図書館等での所蔵状況を調べてみると、作製された部数がもともと少ない「報告書」の場合はわずかに一〇館ほどにとどまり、図書館用語でいう「灰色文献」に属するといつてよい。これに対し、市販された『集成』の場合は約二八〇館に及ぶ。よって今後は『集成』が参照されることが多くなってゆくに違いない。しかしこれま

での論及は——近年の『集成』刊行以後も含めて——『報告書』を典拠に掲げるものがほとんどであり、個々の結縁者名をとりあげる際、納入品名とあわせて『報告書』の該当ページを註記するものが多い。また『報告書』ではその凡例にある通り「毎紙、一行ごとに数字番号を付し」であるため、それをもって表示し参照の便をはかっている論者も少なくない。いっぽう『集成』では、凡例に「いちじるしく長文のものについては／＼によって改行を示す」とある通り、全体的な編集方針のもと、制約ある紙幅に納入品の全貌を収録する必要がやむなく優先されており、行番号の表示もなされてはいない。そこで【表3】では、両書にわたるクロスレファレンス情報の整備も企図したのである。

今回、筆者自身が本像とその像内納入品および研究史に関して気づいたことは少なくないのだが、いずれも別の機会に委ねることとしたい。なお本稿の内容には、平成二三年度にメトロポリタン東洋美術研究センターより研究助成を受けたテーマ「南都復興期における多数者結縁造像と解脱房貞慶」、および（公財）福武財団の平成二五年度瀬戸内海文化研究・活動支援助成を受けたテーマ「造形文化資料からみた瀬戸内海沿岸における鎌倉仏教の地域的展開——彫刻を中心に——」（研究代表者 杉崎貴英）による成果が含まれることを付記しておく。

【表1】像内納入品一覧——および写真図版資料所在状況（公刊資料および図書館等所蔵資料）——

・No. および名称は『報告書』『集成』とも共通しているため、本表および後掲【表3】でも踏襲した。  
 ・『報告書』『集成』所収の図版（モノクロのみ）はすべて掲載する。法量など各納入品の詳細は両書を参照されたい。  
 ・その他は、近年の良質なカラー図版と、『報告書』『集成』所収の図版を補うモノクロ図版を載せるものを掲げる。

No.	名称	頁数	紙数	図版資料（M=モノクロ、C=カラー）
1	源智阿弥陀如来造立願文	1通	1紙	M『報告書』『集成』ほか多数。 C京都国立博物館編『法然』展図録（2011年）ほか多数。
2	平季村等百万遍衆	1通	1紙	M『報告書』『集成』 C滋賀県立琵琶湖文化館編『女性と祈り』展図録（2007年）、京都国立博物館編『法然』展図録（2011年） *『報告書』では「平光衝」、『集成』では「平光衝」と翻刻されている人名は、上記の図版によれば「平光衝」と判読しうる。
3	四十八人念仏衆交名	1通	1紙	M「滋賀県信楽町 玉桂寺で発見された／源智上人造立願文並びに念仏結縁交名の一部（写真）」（『宗報』728、1979年） *キャプションでは「百万遍念仏者交名（一紙）」としている。
4	念仏結縁交名	1通	2紙	M『報告書』
5	一万遍念仏人士	1通	1紙	（公刊図版資料なし）
6	越中国百万遍勤修人名	1巻	3紙	M『報告書』 *第1紙表50行目まで。 M『集成』 *第1紙表57行目まで。 C国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』展図録（2002年） *第1紙表31行目まで。 C滋賀県立琵琶湖文化館編『女性と祈り—信仰のすがた—』展図録（2007年） *41（2）は「比丘尼名分」「女名分」前後を掲出。第2紙表28行目から第3紙表13行目まで。 *41（3）は紙背。第3紙裏2行目から同56行目まで。 *この結縁交名が、本像の納入品のなかでも「とくに丁寧に記されている」[玉山1979]、「清書されている」[伊藤1981]ことを、上記の図版によっても視認できる。
7	百万遍念仏衆注進帳	1冊	21丁	M『報告書』 *第20丁左・第21丁右（裏表紙裏）。
8	をみのさたつね等交名帳 *通称「エゾの交名」。	1冊	19丁	M『報告書』『集成』 *いずれも第18丁左・第19丁右（裏表紙裏）。 M滋賀県立琵琶湖文化館編『浄土教の世界』展図録（1992年） *巻末。 C京都国立博物館編『法然』展図録（2011年） *巻首と巻末。 *いずれも巻末の図版は第19丁右末尾の一行「エソ三百七十人」を含む。
9	順阿弥陀仏等交名	1巻	3紙	M『集成』 *第1紙表25行目まで。 *上記7行目最下部に、快慶に比定される「(梵字アン) 阿弥陀仏」を視認できる。
10	蓮仁等交名	1巻	3紙	（公刊図版資料なし）
11	平学等交名	1巻	4紙	（公刊図版資料なし）
12	源頼朝等交名	1巻	2紙	M『報告書』 *第2紙裏45行目まで。 M『集成』 *第1紙表25行目まで、および第2紙裏の全て。 C京都国立博物館編『法然』展図録（2011年） *第1紙表64行目まで。 *第1紙表1行目は「源智の筆跡」であることが指摘されている[玉山1979・伊藤1981]。それは本表【1】の「源智阿弥陀如来造立願文」との図版による比較でも承認しうる。 *第1紙表1行目の最下部は、『報告書』『集成』とも「公経」と翻刻するが、「公経」が正しい。それは上掲の図版によっても視認できる。後掲【表3】の(E)も参照のこと。
13	大納言殿等交名	1巻	2紙	（公刊図版資料なし）
14	成阿弥陀仏等交名	1巻	3紙	（公刊図版資料なし）
15	橘守利等交名	1巻	11紙	（公刊図版資料なし）
16	念仏勸進状	1巻	7紙	M滋賀県立琵琶湖文化館編『浄土教の世界』展図録（1992年） *26行目まで。
17	源氏等交名	1巻	12紙	（公刊図版資料なし）
18	一万遍念仏者交名	1片	1紙	C京都国立博物館編『法然』展図録（2011年）
19	念仏者交名（断簡）	1片	1紙	M『集成』 *末尾7行のみ。
20	念仏者交名（断簡）	1片	1紙	M『集成』
21	念仏者交名	1通	1紙	（公刊図版資料なし）
22	入道入蓮等交名（断簡）	1通	1紙	（公刊図版資料なし）
23	念仏者交名	3片	3紙	（公刊図版資料なし）
24	消息断簡（断簡）	1通	1紙	（公刊図版資料なし）
25	念仏供養札等一括	1括	—	（公刊図版資料なし）
26	名号紙片	1片	1紙	（公刊図版資料なし）
27	名号紙片	9片	9紙	C国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』展図録（2002年） *3片。
28	念仏数取り状	1通	1紙	M滋賀県立琵琶湖文化館編『仏像—胎内の世界—』展図録（1999年） C国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし』展図録（2002年）
29	念仏数取り紙片	1片	1紙	（公刊図版資料なし）
30	念仏数取り紙片	1片	1紙	（公刊図版資料なし）
31	念仏数取り紙片	1片	1紙	（公刊図版資料なし）
追1	清原重遠等交名	1片	1紙	（公刊図版資料なし）

【備考】—以上のほか、マイクロフィルムあるいは紙焼写真帳として、以下の機関に所蔵される下記の資料がある。  
 ・東京大学史料編纂所 ……『木造阿弥陀如来立像像内納入文書』2冊（1981年作成、請求記号：6171.08-41）  
 ・佛教大学図書館 ……『玉桂寺阿弥陀仏像胎内文書』マイクロフィルム（請求記号：MF 35 / 143）  
 ・佛教大学図書館（歴史学部資料室所在） ……玉桂寺阿弥陀仏像胎内文書調査団編『玉桂寺阿弥陀仏像胎内文書』マイクロフィルム紙焼写真（1981年作成、請求記号：複写mf / 151）

【表2】一関連書誌および事項年表

・同年の欄内での配列は、著者名の50音順を基本とするが、先後関係を考慮した部分もある。  
 ・【展示】は、像あるいは納入品が博物館施設等で展示公開された機会を示し、図録（カタログ）の書誌をもって記載した。

元和年中 (1615-24)		*鉄砲鍛冶の芝辻道逸、稲荷神社（現：堺市北区北半町〔旧稲荷町〕の高須神社）を勧請するという（『和泉名所図会』）。
宝暦3	1753	*台座銘。「堺稲荷宝祥院」が願主とある。宝祥院（真言宗）は高須神社の別当寺であった。同社については次の欄を参照。 →この時点では、玉桂寺ではなく堺の宝祥院にあった可能性が考えられている。
寛政8	1796	『和泉名所図会』刊。「高須稲荷社」を掲載。「高須町にあり。鍛冶芝辻道逸、元和年中に勧請しけるなり。今、真言宗宝祥院、これを護る」とあり、宝祥院の「不動堂」「庫裡」が描かれる。
?		*18世紀～19世紀の間までに、近江・玉桂寺（真言宗）の所有に帰するか。
昭和49	1974	*5月29日、文化庁による文化財集中地区特別総合調査で玉桂寺地蔵堂から見出される。当時の様子は〔宮本1975・1981〕〔松岡2013〕に詳しい。 文化庁の田邊三郎助氏、像内納入品の存在を示唆。この後、琵琶湖文化館へ寄託される。
昭和50	1975	宮本忠雄「文化財特別総合調査を終えて—滋賀県—」（『月刊文化財』146）
昭和51	1976	文化庁編・刊『湖南地方の文化財（滋賀県）』（文化財集中地区特別総合調査報告書13）
昭和52	1977	*2月21日、滋賀県立琵琶湖文化館にてX線撮影調査が実施される。納入品の存在を確認。
昭和53	1978	*3月17日、この日付で、滋賀県指定有形文化財となる。 【展示】滋賀県立琵琶湖文化館編『鎌倉時代の文化』（近江文化史シリーズ第5回展）図録
昭和54	1979	*8月23日、美術院国宝修理所における解体修理により、像内納入品が発見される。 8月30日、新聞各紙が報道する（例：『朝日新聞』大阪版の同日朝刊22面記事）。 *9月18日、浄土宗関係者（玉山成元氏・伊藤唯真氏ら）による閲覧が初めてなされる。 ——「法然上人追福の／貴重な胎内文書発見」（『浄土宗新聞』152） ——「往生を願う10余万人／滋賀県玉桂寺阿彌陀仏像胎内文書報告記」（『浄土宗新聞』153） 玉山成元「新発見の「源智造立願文」」（『宗報』728） ——「口絵 源智造立願文」（『日本仏教史学』15）
昭和55	1980	*この年度に、佛教学史学専攻の研究者により納入文書の積文作成などがなされる。 →その成果は〔玉桂寺阿彌陀如来立像胎内文書調査団 1981〕として刊行される。 玉山成元「中世浄土宗史の諸問題（続）」（『宗報』740） 角田文衛「日本の女性名（上）」（『教育社歴史新書30』（教育社））*速報的にとりあげている。 →新版：同『日本の女性名 歴史的展望』（国書刊行会、2006年） 三田全信『改訂増補 浄土宗史の諸研究』（山喜房仏書林） *収録する一編「勢観房源智について」の末尾に「特報」として言及、巻頭にはモノクロ図版を簡明な解説を添えて掲載。
昭和56	1981	玉桂寺阿彌陀如来立像胎内文書調査団編『玉桂寺阿彌陀如来立像胎内文書調査報告書』（玉桂寺） 宮本忠雄「納入品発見までの経緯」 同「阿彌陀如来立像と修理概要」 玉桂寺阿彌陀如来立像胎内文書調査団編 『玉桂寺阿彌陀如来立像胎内文書調査報告書』（玉桂寺） 伊藤唯真 a 「あとがき」 伊藤唯真 b 「勢観房源智の勸進と念仏衆」（同『浄土宗の成立と展開』吉川弘文館） →再録：同『聖仏教史の研究』（同著作集Ⅰ）（法蔵館、1995年） 中野正明「二尊院所蔵七箇条制誡について」（『三康文化研究所年報』13） →再録：伊藤唯真・玉山成元編『法然上人と浄土宗』（日本仏教宗史論集5）吉川弘文館） *6月9日、この日付で国指定重要文化財となる。 文化庁文化財保護部「新指定の文化財（美術工芸品）」（『月刊文化財』213） 【展示】滋賀県立琵琶湖文化館編『近江の名宝』展図録〔解説＝高梨純次〕
昭和57	1982	——「お誕生八五〇年慶讃の年に／法然上人の遺骨と遺髪発見／大本山知恩寺のお像から」（『浄土宗新聞』183〔5月1日号〕） *美術院国宝修理所で解体修理の際、御影堂本尊法然坐像（室町時代）から発見。包紙の筆跡と旧玉桂寺像源智造像願文との類似を示唆。 伊藤唯真「法然上人の宗教的世界—お誕生の歴史的意義—」（浄土宗第七地区教化センター・浄土宗布教師会中四国支部） 久保尚文「胎内文書は語る 信楽・玉桂寺の阿彌陀像」上・下（『北日本新聞』3月2・9日朝刊） *地域史研究の立場から初めて活用した成果。のち〔久保1983〕で詳論される。 【展示】富山市郷土博物館編『重要文化財展中世 出陳文化財解説』（越の至宝シリーズ2）（富山市教育委員会）
昭和58	1983	伊藤唯真「源智と法然教団」（『仏教文化研究』28） 久保尚文「中世前期越中における浄土信仰の展開」（『富山史壇』82） →再録：同『越中における中世信仰史の展開』（桂書房、1984） 玉山成元 a 「勢観房源智について」（『大正大学大学院研究論集』7） 玉山成元 b 「法然の肖像と阿彌陀仏造立」（『日本仏教史学』18） 【展示】奈良国立博物館編『浄土曼荼羅—極楽浄土と来迎のロマン—』展図録
昭和59	1984	井上一稔「玉桂寺阿彌陀如来像」（『滋賀県百科事典』大和書房） 梶村昇「勢観房源智の意図したもの」（竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会編『宗教文化の諸相』山喜房仏書林） 久保尚文「神仏信仰の発展」（『富山県史』通史編2中世、第1章第3節） 溪逸郎編集責任『信楽町の文化財 指定文化財解説』（信楽町教育委員会） 深貝慈孝「勢観房源智の著書についての一考察」（竹中信常・水谷幸正編『法然浄土教の総合的研究』山喜房仏書林）
昭和60	1985	菊地勇次郎 a 「源智」（『国史大辞典』5、吉川弘文館） 菊地勇次郎 b 「源智と静遍」補註（1）（同『源空とその門下』法蔵館） *再録時に付された補註で言及。なお初出は同題で『浄土学』28（1961年）。

		久保尚文 a 「鉢の木」 伝承と勸進聖一越中桜井庄の場合一 (『かんとりい』 8) →再録: 同『越中における中世信仰史の展開 (増補)』 (桂書房、1991年) * 「越中国百万遍勤修人名」の活用は、その後も久保氏により、自治体史など富山県下の地域史関係の著述においてたびたびなされているが、以下その詳細は適宜省略する。	
		久保尚文 b 「越中一向一揆と浄土宗教団の組織化について」 (北西弘先生還暦記念会編『中世社会と一向一揆』 吉川弘文館)	
		藤堂恭俊 「一枚起請文をさずける師・うける弟子 (IV)」 (一枚起請文にきく5) (『知恩』 465) * 「勢観房源智上人のご業績一その三一」。願文の現代語訳。[藤堂1986・87] にほぼ再録。	
		藤井實應 「三上人遠忌に向けて」	『知恩』 472
		伊藤唯真 「源智上人について」	〈三上人遠忌おまちうけ号〉
		野村恒道 a 「法然の法難と源智」 (『印度学仏教学研究』 33-2)	
		野村恒道 b 「勢観房源智の親類紀氏について」 (『三康文化研究所報』 16・17 [合併号])	
		【展示】 滋賀県立琵琶湖文化館編『甲賀の社寺』〈近江社寺シリーズ第2回〉 展図録 [解説 = 井上一稔]	
昭和61	1986	伊藤唯真 a 「源智上人一その生涯と思想一 (ア)・(イ)」 (『宗報』 796・797) →再録: 同『法然の世紀一源平争乱の世に万民救済を説く一』 (浄土選書30) (浄土宗)	
		伊藤唯真 b 「吉備の古代氏姓一高野神社随神像銘・玉桂寺阿弥陀仏像胎内文書にみる一」 (『神道大系』 月報62) →再録: 同『浄土宗史の研究』 (同著作集IV) (法蔵館、1995年)	
		伊藤唯真 c 「源智上人について」 (『佛教論叢』 30)	
		伊藤唯真 d 「源智上人と阿弥陀仏像造立願文」	
		北崎耕堂 「勢観房源智上人の念仏興隆」	
		平祐史 「勢観房源智上人を考える」	
		田野島賢至 「勢観房源智上人鑽仰」	華頂文庫編集委員会編 『勢観房源智上人』 (総本山知恩院布教師会)
		角田文衛 「勢観房源智上人と静遍僧都」	
		藤堂恭俊 「勢観房源智上人とその業績」	
		宮沢正順 「源智上人の阿弥陀如来造立願文について」	
		伊藤唯真・玉山成元 「主要史料解題」 (同編『法然上人と浄土宗』 (日本仏教宗史論集5) 吉川弘文館)	
		薄井和男 「滋賀・阿弥陀寺の行快作阿弥陀如来立像」 (『仏教芸術』 167)	
		大石直正 「奥羽の荘園公領についての一考察一遠島・小鹿島・外が浜一」 (高橋富雄編『東北古代史の研究』 吉川弘文館)	
		柴田實 a 「勢観房源智の造像勸進の随縁者一信楽玉桂寺木造阿弥陀如来立像の胎内納入文書に就いて一」 (『慶應史学』 12)	
		柴田實 b 「蝦夷と念仏」 (『国史と国語』 28-2) * 「エゾの交名」に言及。	
		玉山成元 「浄土宗」 (『国史大辞典』 7、吉川弘文館)	
		中野正明 「法然の送山門起請文について」 (『仏教史学研究』 29-1) → [中野1994] に再録。	
		野村恒道 「源智と石清水八幡宮」 (『仏教論叢』 30)	
		百萬遍知恩寺布教師会編・発行『百萬遍の聖者 源智上人』 (百萬遍知恩寺布教師会) * 近畿地方を中心とした各地の布教師15名による法話 (造像願文が活用される) を収録。	
		三宅久雄 a 「玉桂寺阿弥陀如来像とその周辺」 (『美術研究』 334) * [宮本1981] と同様、作者が快慶の弟子行快である可能性を提示。	
		三宅久雄 b 「仏師行快の事蹟」 (『美術研究』 336)	
		三宅久雄 c 「鎌倉時代の浄土宗教団における造像に関する研究」 (『鹿島美術財団年報』 4)	
		武笠朗 「安楽寿院阿弥陀如来像について」 (『仏教芸術』 167) * 註44に「中世以前の像内漆箔像一覽」を掲出し、本像を掲載する。	
		村田真宏 「快慶における来迎の造形とその展開」 (『福島県立美術館研究紀要』 2)	
		山本勉 「安阿弥様阿弥陀如来立像の展開一着衣形式を中心一」 (『仏教芸術』 167) * 10月4日、西川新次氏・水野敬三郎氏ら、実査 (→ [山本2004] はこの知見に基づく)。	
昭和62	1987	伊藤喜良 「日本中世における国家領域観と異類異形」 (『歴史学研究』 573) * 「エゾの交名」に言及。 →同『日本中世の王権と権威』 (思文閣出版、1993年) に再録)	
		伊藤唯真 「源智勸進の念仏結縁交名より見たる法然教団について」 →再録: 『聖仏教史の研究』 (同著作集 I) (法蔵館、1995年)	三上人御遠忌記念出版会 編・発行『源智・弁長・良忠 三上人研究』
		関山和夫 「『平家物語』に見る浄土教と源智上人の立場」	
		深貝慈孝 「『勢観上人の音信』と『源智の書状』について」	
		大谷雅彦 「中世の信仰と文化」 (『野洲町史』 第一巻通史編1 第四章第四節)	
		副島弘道 「保寧寺阿弥陀三尊像と仏師宗慶 (下)」 (『国華』 1103)	
		玉山成元 『三上人奉讃記念 勢観房源智上人』 (浄土宗東京教区教務所)	
		野村恒道 「勢観房源智の勸進」 (『仏教論叢』 31)	
		宮本忠雄 「阿弥陀如来立像 玉桂寺」 解説 (久野健監修『仏像集成4 (滋賀)』 学生社)	
昭和63	1988	赤田光男 「勸進帳」 項	『世界大百科事典』 (平凡社)
		伊藤唯真 a 「百万遍念仏」「法然」 項	
		伊藤唯真 b 「エゾの交名」 (『名前と系図・花押と印章』 (週刊朝日百科 日本の歴史 別冊 歴史の読み方8) 朝日新聞社)	
		入間田宣夫 「中世エゾの人名について」 * 「エゾの交名」に言及。	北海道・東北史研究会編 『北からの日本史』 (三省堂)
		大石直正 「中世の奥羽と北海道一「えぞ」と「日のもと」一」 * 「エゾの交名」に言及。	
		玉山成元 「勢観房源智研究の史料について」	『仏教文化研究』 33
		藤堂恭俊 「勢観房源智上人伝承にかかる師上人の遺文 一とくに『一期物語』と『浄土随聞記』の関係を中心として一」 →再録: 同『法然上人研究』 第2巻 (思想篇) (山喜房仏書林、1996年)	

この年は源智の七五〇年遠忌にあたり、それにちなんだ言及も多くなされている。

		野村恒道「源智の俗縁と浄華院」 【展示】堺市博物館編『和泉地方の仏像』展図録 [解説 = 吉原忠雄]
平成元	1989	伊藤唯真「法然と専修念仏」(濱島正士責任編集『浄土教』(図説日本の仏教3) 新潮社) 野洲町立歴史民俗資料館編『平家物語と祇王』展図録
平成2	1990	伊藤唯真 a 「法然と専修念仏」(『岡山県史』第四卷中世 I 第五章第一節) 伊藤唯真 b 「百万遍念仏」項 (『国史大辞典』11、吉川弘文館) 斎藤孝「古代・中世の建築と美術」(『岡山県史』第四卷中世 I 第六章) 佐々木進「湖南のほとけたち」(清水眞澄編『仏像を旅する 東海道線』至文堂) 細川涼一「唐招提寺釈迦如来像胎内文書と女性・虫・非人」(『歴史評論』483) →再録: 同『日本中世の社会と寺社』(思文閣出版、2013年) 三宅久雄「浄土教成立期における彫刻界の動向」(『International Symposium of the Conservation and Restoration of Cultural Property PERIODS OF EAST ASIA』東京国立文化財研究所)
平成3	1991	梶村昇「念仏に生きた人—勢観房源智」(『大法輪』第57巻4号 [1990年4月号] ~ 第58巻5号 [1991年5月号]) → [梶村1993] に再録。 青木淳「結縁資料の研究 (I) —金石史料を中心に—」(『無遮』(和光大学) 武者小路研究室) 入間田宣夫『武者に世に』(日本の歴史7) (集英社) * 一般向け日本史通史シリーズの一冊。本像の結縁交名が図版入りでとりあげられた。 久保尚文「越中の浄土宗寺院の成立をめぐる諸問題」(同『越中における中世信仰史の展開 (増補)』(桂書房、1991年)) 熊田由美子「晩年期の運慶—その造像状況をめぐり—」(『東京芸術大学美術学部紀要』26) * 新仏教の造像観に関して例示。 玉山成元「中世浄土宗史の回顧と展望」(浄土宗総合研究所編『浄土宗文化論』浄土宗出版室) 中野正明「法然配流の疑義」(『印度学仏教学研究』79 [40-1]) 古川与志継「祇王伝説と祇王井」(『野洲町立歴史民俗資料館研究紀要』3) 森浩一「西日本に拡がる「エミシ」勢力」(『歴史読本』36-15) * 「エゾの交名」に言及。 →同『古代史 津々浦々』(小学館、1993年) に再録)
平成4	1992	青木淳「西山證空における造像の研究 (一) 一京都府乙訓郡・大念寺阿彌陀如来立像の造立をめぐる—」(『西山学会年報』2) 【展示】滋賀県立琵琶湖文化館編『浄土教の世界—苦悩する精神史—』展図録 高梨純次「仏師の信仰」(滋賀県立琵琶湖文化館編『浄土教の世界』展図録) * 「第24回古代のアイヌモシリを尋ねて」と題する見学会、9月13日に玉桂寺を訪問予定という (『朝日新聞』京都版9月3日朝刊)。
平成5	1993	青木淳 a 「東大寺僧形八幡神像の結縁交名—造像を中心とした中世信仰者の結衆とその構造—」(『密教図像』12) 青木淳 b 「西山證空上人における造像の研究 (二) 一 大念寺阿彌陀如来立像における血族の結衆の特質—」(『西山学会年報』2) 梶村昇『勢観房源智』(念仏に生きた人1) (東方出版) 【展示】奈良国立博物館編『鎌倉仏教—高僧とその美術—』[解説 = 井上一稔]
平成6	1994	—『富山県の地名』(日本歴史地名大系16) (平凡社) * 随所で本像納入文書に基づく知見を記述する。当該項目はデータベース版を参照のこと。 青木淳「滋賀・阿彌陀寺阿彌陀如来像の結縁交名」(『印度学仏教学研究』43-2) 石渡信一郎「古代蝦夷と天皇家」(三一書房) * 「エゾの交名」に言及。 伊藤唯真「源智」(『日本大百科全書』小学館) 井上一稔「概説 運慶・快慶と慶派仏師」・「阿彌陀如来立像 阿彌陀寺」解説 (奈良国立博物館編『運慶・快慶とその弟子たち』展図録) 平雅行「越前・若狭の専修念仏」(『福井県史』通史編2中世 第一章第七節三) 中野正明「法然遺文の基礎的研究」(法蔵館) → 増補改訂版 (法蔵館、2010年)
平成7	1995	青木淳 a 「像内納入品資料に見る中世的「結衆」の特質—快慶作例を中心とする結縁交名の総合的研究—」(総合研究大学院大学博士論文: 1995年3月23日学位授与) 青木淳 b 「快慶作遣迎院阿彌陀如来像の結縁交名—像内納入品資料に見る中世信仰者の「結衆」とその構図—」(『仏教史学研究』38-2) * [青木1999b] に吸収。 伊藤唯真「阿彌陀仏号所有者の析出」(『聖仏教史の研究』上、「阿彌陀仏号について—わが国浄土教史研究の一視点—」『佛教大学研究紀要』35 [1958年] に加筆して再録) 井上満郎「近江と俘囚—被差別部落起源説批判—」(木村至宏編『近江の歴史と文化』思文閣出版) * 「エゾの交名」に言及。 細川涼一「庶民の願い極楽浄土—海印寺寂照院・光林寺の像内納入品文書から—」 (『信仰と自由に生きる』(中世の風景を読む5) 新人物往来社) →再録: 同『中世寺院の風景—中世民衆の生活と心性—』(新曜社、1997年) 峰岸純夫「中世東国の浄土信仰—百万遍念仏、善光寺阿彌陀三尊仏信仰などをてがかりに—」 (地方史研究協議会編『宗教・民衆・伝統—社会の歴史的構造と変容—』(雄山閣) →再録: 同『中世東国の荘園公領と宗教』(吉川弘文館、2006年)
平成8	1996	青木淳 a 「仏師快慶と法然—中世職工人研究の新視点—」(『印度学仏教学研究』44-2) 青木淳 b 「初期證空教団における「結衆」の特質—大念寺阿彌陀如来像像内納入品資料の分析を中心として—」(『西山学会年報』6) 伊藤唯真「エゾと念仏」(『鷹陵』148) →再録: 同『日本人と民俗信仰』(法蔵館、2001年) 大石直正+峰岸純夫「対談 地域史から見た中世日本」(『本郷』7) * 峰岸氏は [峰岸1997] と同様、本像の結縁交名を、中世前期の日本列島人名簿と評価する。なお [峰岸1995] も参照。 野口実「中世前期の船橋—領主・荘郷・港津・寺院—」(千葉歴史学会編『中世東国の地域権力と社会』(千葉史学叢書2) 岩田書院) 吉良潤+加藤義謙「西山上人証空 実父は久我通親」(『中外日報』12月7日号) 稲田順学+稲吉満了「西山上人証空 実母は平教盛の娘」(『中外日報』12月10日号)

平成9	1997	吉良潤・稲田順学・稲吉満了・小島英裕・稲田廣演「秘められた勢観房源智の出自①～⑤」 (『中外日報』1月7日・9日・11日・14日・翌年3月7日)			
		斎藤孝「中国・四国・九州の仏像」(久野健監修『仏像集成8中国・四国・九州』学生社) *岡山・東寿院阿弥陀如来立像(快慶作)と初期浄土宗との関連を述べるなかで本像に言及。			
		野村恒道「玉桂寺」源智」項(藤井正雄ほか編『法然辞典』東京堂出版)			
		峰岸純夫「仏像胎内納入品」(地方史研究協議会編『地方史事典』弘文堂) * [大石+峰岸1996] も参照。			
平成10	1998	稲田順学・稲田廣演「證空の母・尾張局の出家」			
		吉良潤・稲田順学・稲吉満了 a 「証空と源智は平家の親類同士」[初出=吉良ほか1997の①]	『深草教学』18		
		吉良潤・稲田順学・稲吉満了 b 「勢観房源智の母は建礼門院右京大夫」[初出=吉良ほか1997の②]			
		工藤雅樹「坂上田村麻呂の登場と胆沢鎮守府」(同『蝦夷と東北古代史』吉川弘文館) * 「エゾの交名」に言及。			
平成11	1999	青木淳 a 「快慶作例を中心とする中世結縁交名の比較研究」(『鹿島美術財団年報』16)			
		青木淳 b 「遣迎院阿弥陀如来像内納入品資料」(日文研叢書1) (国際日本文化研究センター) * 論考部分は[青木1995b]が原形。			
		土井通弘「鎌倉期における阿弥陀像造立の一考察」(『鹿島美術財団年報』16)			
		中井真孝「念仏結社の展開と百万遍念仏」(蘭田香融編『日本仏教の史的展開』塙書房) →再録:同『法然上人絵伝の研究』(思文閣出版、2013年)			
		【展示】滋賀県立琵琶湖文化館編『仏像一胎内の世界—』展図録 [解説=土井通弘]			
平成13	2001	中野玄三「保存修理の成果」(城陽市教育委員会編・発行『極楽寺阿弥陀如来立像修理報告書』) →再録:同『続日本仏教美術史研究』(法蔵館)、「城陽市極楽寺阿弥陀如来立像について—快慶最後の造像—」と改題			
		平成14	2002	青木淳「仏師快慶とその信仰圏」(伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』法蔵館) 森浩一「蝦夷私考(ア) 吉弥候部と毛人」(『一冊の本』76) * 「エゾの交名」に言及。なお[森1991]も参照。 →再録:同『山野河海の列島史』(朝日選書746) (朝日新聞社、2004) 【展示】国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし—密教・禅僧・湯屋—』展図録 [解説=高橋一樹]	
平成15	2003	青木淳「仏師快慶と天台関係の造像活動」(『日本宗教文化史研究』7-2)			
		石上善應「日本における阿弥陀仏像の再整理」(『佛教文化研究』47・48 [合併号])			
		伊藤唯真「伊藤唯真『浄土宗の成立と展開』」(黒田日出男ほか編『日本史文獻事典』弘文堂)			
		梅原猛『京都発見(五)—法然と障壁画—』(新潮社)			
		奥健夫「源信造立の地藏菩薩像に関する新資料」(『仏教芸術』269)			
		児島恭子「中世の蝦夷観」 * 「エゾの交名」に言及し、既往の理解に対し異見も述べる。 (同『アイヌ民族史の研究—蝦夷・アイヌ観の歴史の変遷—』吉川弘文館)			
平成16	2004	井原今朝男『中世寺院と民衆』(臨川書店) →増補版(臨川書店、2009年)。			
		大橋俊雄「初期法然教団仲張の様相—『交名帳』を指標として—」 * 大橋氏は2001年に没。 (宮林昭彦教授古稀記念論文集刊行会編『仏教思想の受容と展開 宮林昭彦教授古稀記念論文集』1、山喜房仏書林)			
		内田啓一「仏教版画の聖なる造型と納入空間の一特色」 (頼富本宏編『聖なるものの形と場』[法蔵館]、のち同『日本仏教版画史論考』[法蔵館、2011年]に再録)			
		鬼頭正道「『玉桂寺文書』の研究」(『西山禅林学報』27)			
		櫻井成昭「大分県における阿弥陀信仰と浄土真宗」(大分県立歴史博物館編『南無阿弥陀仏—浄土への道—』展図録)			
		皿井舞「勸進と結縁の思想的背景—『覚禅鈔』造塔法を手掛かりとして—」(覚禅鈔研究会編『覚禅鈔の研究』親文院堯榮文庫) * 仏像の内部に結縁交名を籠める行為についての論及のなかでとりあげる。			
		鈴木景二「立山浄土山と信濃善光寺」(『富山史壇』145) * 「越中国百万遍勤修人名」に言及。			
		谷川守正「黒谷本「一枚起請文」花押の仏教教育的意味」(『日本仏教教育研究』12)			
		中野正明「法然と源智」 (宮林昭彦教授古稀記念論文集刊行会編『仏教思想の受容と展開 宮林昭彦教授古稀記念論文集』1、山喜房仏書林)			
		三宅久雄「鎌倉時代の彫刻 仏と人のあいだ」(日本の美術459) (至文堂)			
		山本勉「阿弥陀如来立像 玉桂寺」(『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代 造像銘記篇』2、中央公論美術出版)			
		平成17	2005	青木淳 a 「解題 東寿院阿弥陀如来像の像内納入品資料」 (同編『東寿院阿弥陀如来像内納入品資料』(日文研叢書34) 国際日本文化研究センター)	
				青木淳 b 「快慶以後」(真鍋俊照編『仏教美術と歴史文化』法蔵館)	
塩田敏夫「阿弥陀如来像」(支局長からの手紙:滋賀) (『毎日新聞』7月18日地方版/滋賀) * 玉桂寺からの発見当時の様子について取材した記事。					
【展示】福井市立郷土歴史博物館『極楽—北陸の浄土教美術—』展図録 [解説=志賀太郎]					
平成18	2006	吉良潤「祇園女御の仏舎利と法然」(『西山学苑研究紀要』1)			
		【展示】奈良国立博物館編『大勸進 重源—東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出—』展図録 [解説=鈴木喜博]			
平成19	2007	伊藤唯真「法然上人の四国配流と遺跡・伝承」 * 2003年10月6日開催の講演録。 (浄土宗南海教区教化団・浄青会編『配流八〇〇年追思 讃岐の法然上人』浄土宗南海教区教化団)			
		吉良潤「祇園女御の仏舎利と法然(第二篇)」(『西山学苑研究紀要』2)			
		杉崎貴英「砺波市常福寺阿弥陀如来立像の造立背景に関する一試論 —安阿弥様・浄土宗・越中国百万遍勤修人名・徳大寺家領般若野莊—」(『日本宗教文化史研究』11-2)			
		鈴木景二「ザラ峠・針の木峠越えの道と善光寺信仰」(交通史研究会例会報告、9月8日) * 「越中国百万遍勤修人名」に言及。ただし『交通史研究』64 (2007年12月) に載る「例会報告要旨」ではその部分の記述は省略されている。			
		山田雅教「弥陀と御影—中世の専修念仏者の礼拝対象と祖師信仰—」(『高田学報』95) 【展示】滋賀県立安土城考古博物館編『甲賀郡の歴史と風土』展図録 [解説=山下立]			

		【展示】滋賀県立琵琶湖文化館編『女性と祈り—信仰のすがた—』展図録 [解説=榊拓敏]	
平成21	2009	——「法然が残した現代へのメッセージ——800年大遠忌に向けて (2) = 特集」(『読売新聞』9月20日:東京朝刊:特A) *9月30日～10月2日に開かれた第95次定期宗議会議にて、議案第15号「『玉桂寺阿彌陀如来像請来』について承認を求める件」が「満場一致で承認」される。 *10月1日の『京都新聞』朝刊 (WEB版は前日付)、「法然供養の阿彌陀像、知恩院へ」の見出しで、浄土宗が法然800年遠忌を期した知恩院安置計画を検討している由を報道。 杉崎貴英「石清水八幡宮祐清造立の阿彌陀像と解脱房貞慶—八幡市正法寺 (八角院) 阿彌陀如来坐像に関する一史料をめぐって—」(『文化史学』65) * [野村1985a・b、1986、1987] の指摘をふまえつつ、本像に言及した。 村野真作「総説」(鎌倉国宝館編『大本山光明寺と浄土教美術』展図録) *12月24日、文化庁、譲渡を許可。26～27日の新聞各紙で報道される。	
平成22	2010	*1月18日、玉桂寺から浄土宗へ、所有権を移す契約が結ばれる。 *2月1日、浄土宗へ譲渡され、佛教大学宗教文化ミュージアムに搬入・保管される。 同1～3日に新聞各紙報道。 ——「(特集) 源智上人報恩の阿彌陀如来像 (旧・玉桂寺阿彌陀如来) / 800年大遠忌を機に浄土宗へ!! / 法然上人も源智上人もおよこび」(『浄土宗新聞』517 [3月1日号]) 谷川健一『列島縦断地名道遥』(富山房インターナショナル) * 「エゾの交名」に言及。 伊東史朗『京都の鎌倉時代彫刻』(日本の美術535) (至文堂) 杉崎貴英「菩提山蓮光房とその周辺—中世前期南都における阿彌陀信仰者の存在状況と解脱房貞慶—」(『日本宗教文化史研究』14-2) * [高梨1992] [土井1999] における本像についての言及をふまえつつ、阿彌陀仏号所有者について論及した。 松浦正昭 a 「本願の美」(11月21日、砺波市美術館「砺波の真宗風土」展における講演) 松浦正昭 b 「常福寺像 快慶工房作か/浄土教文化史に輝く阿彌陀像」(『北日本新聞』11月29日朝刊文化欄) 12月4日、シンポジウム「法然とその時代の人たち—阿彌陀如来立像の魅力—」開催 (主催=浄土宗・朝日新聞社、於:華頂短期大学) *『朝日新聞』12月5日朝刊・翌年1月10日に記事あり。	
平成23	2011	石上善應「私の法然上人」 林田康順「響流十方」	『浄土』77巻1月号
		*1月12日付の『京都新聞』、法然800年遠忌の同月25日、知恩院で一般公開の旨を報道。 *1月25日10時より「源智上人造立阿彌陀如来立像請来法要」(於:知恩院御影堂)。法然像の坐す須弥壇前に旧玉桂寺像を安置して勤修。導師の伊藤唯真門主は、納入品の内容を踏まえた願文を誦し、垂示では、願文の一節を「無縁社会」に照らして意義づけた。続いて「源智願文に見る二種回向」と題して法語を行った。 ——「大遠忌記念行事が開幕/浄土宗・知恩院/法然上人八百年大遠忌御祥当法要を厳修/源智上人造立阿彌陀如来立像/法然上人と“ご対面”/伊藤門主/功德分かつ結縁網を」(『中外日報』1月27日号) *伊藤唯真門主による願文および垂示の内容についても、引用文を交えつつ詳しく報じる。請来法要については新聞各紙でも、1月25日夕刊～翌日朝刊に報道がなされた。 善裕昭「遺徳を偲んで—源智の阿彌陀像造立—」(『法然—法然の生涯と思想—』(別冊太陽 日本のこころ178) 平凡社) 松浦正昭 a 「阿彌陀来迎像と越中般若野莊」(2月18日、となみ散居村ミュージアムにおける講演) *「法然の枕本尊か 常福寺の阿彌陀如来立像」(『北日本新聞』2月19日) に概要が報じられている。 『芸術新潮』62巻4号 (特集=法然上人800回忌記念 大特集 法然—こころの改革者) 【展示】京都国立博物館編『法然—生涯と美術—』展図録 [解説=浅湫毅 (像)・羽田聡 (納入品)] 伊藤唯真「(『はがき通信』欄)」(『日本歴史』758 [平成23年7月号]) *本像の結縁交名の検索システムの構築を「夢」として述べている。 土井通弘「法然、時代とその生涯」(岡山県立博物館編『法然上人と岡山』展図録) 【展示】東京国立博物館編『法然と親鸞ゆかりの名宝』展図録 [総説=高橋裕次、作品解説=浅見龍介] 浅見龍介「東京国立博物館 法然上人800回忌・親鸞聖人750回忌 特別展「法然と親鸞 ゆかりの名宝」」(『文化庁月報』518) 伊藤茂樹「法然と東大寺勸進」(福原隆善編『八百年遠忌記念法然上人研究論文集』知恩院浄土宗学研究所) 今堀太逸「法然上人信仰の展開と東大寺」(真鍋俊照編『密教美術と歴史文化』法蔵館) 杉崎貴英「峰定寺釈迦如来像の研究史—像内納入品・宋風・慶派仏師・俊乗房重源・解脱房貞慶—」(『京都造形芸術大学紀要』15) 松浦正昭 b 「親鸞より法然へささげられた快慶仏」((一社) 社会遺産学芸員協会) *愛知・大御堂寺阿彌陀像の特別公開 (12月5日～1月31日、於:大阪丸紅ビル) で配布。 (DVD) 『法然上人報恩の弥陀～込められた源智上人の想い～』(浄土宗)	
平成24	2012	赤尾栄慶編集代表『研究発表と座談会 浄土宗の文化と美術』 (仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第38冊) (仏教美術研究上野記念財団助成研究会) * [京都国立博物館2011] 期間中に開催された研究会の記録。座談会のなかで、本像の理解をめぐる、加須屋誠氏と大原嘉豊氏との質疑応答がなされている。 伊藤真宏「法然上人と源智上人」(『仏教学部論集』96) 伊藤唯真「法然」(『新版日本架空伝承人名事典』平凡社) 今堀太逸「東大寺再興の念仏勸進と『選択集』」 曾田俊弘「『源智造立阿彌陀如来立像胎内文書』と大徳寺本『拾遺漢語灯録』をめぐる研究概観」 工藤美和子「勢観房源智「阿彌陀如来像造立願文」の中の法然」(『佛教文化研究』56)	佛教大学総合研究所編『法然仏教とその可能性 法然上人八〇〇年大遠忌記念』(法蔵館)
平成25	2013	木内宏「夏至まで」(朝日クリエ) * 「エゾの交名」に題材を得て創作された小説。 工藤美和子「勢観房源智「阿彌陀如来像造立願文」について」(『佛教大学歴史学部論集』4) * [工藤2012] とほぼ同様の内容。 松岡長一郎「甲賀から移された文化財」(別冊淡海文庫20) (サンライズ出版) *本像と納入品が発見された前後の状況を、関係者への聞き取りを軸に詳述している。	

【表3】結縁交名 比定・論及一覧

- ・(A)～(R)の分類は筆者によるが、(B)(C)(D)の区分に関しては〔伊藤1987〕に示唆を受けた。
- ・『報告書』での該当箇所は〔ページ数+上段あるいは下段+『報告書』記載の行番号(納入品の紙面での位置を示す)〕で、『集成』での該当箇所は〔ページ数+上段あるいは下段+そのページの右端から数えて何行目にあたるか〕で示した。
- ・先行研究での指摘に依拠しつつも、所見する箇所は確認の上で訂正をおこなった部分がある。
- ・先行研究での指摘のうち、誤認と判断できたものは掲出してない。
- ・先行研究でとりあげられた、地域的に特有とされる姓については、所見箇所を明記せずに言及されている場合は、原則として同一品目中の初見箇所を掲げた。また配列は原則として、掲出した文献における記述順にしたがった。

記載の人物名	所見する納入品(No.は【表1】に対応する)	『報告書』	『集成』	比定・論及	
<b>(A) 法然・源智・快慶</b> ——被供養者・願主・制作工房——					
「法然房源空」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:21	p.342上12行	源空(法然房、1133～1212)に確定〔玉山1979〕。
「我師上人」	1 源智造立願文	—	p.17上	p.260上	
「先師上人」	—	—	—	—	
「勢観房源智」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:21	p.342上12行	源智(勢観房、1183～1239)に確定〔玉山1979〕。
「弟子源智」	1 源智造立願文	—	p.17上	p.260上	
「沙門源智」	—	—	p.17下	p.260下	
「源智」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.224上:71	p.358下8行	〔伊藤1987〕は、源智の可能性を指摘。
「(梵字ア)阿弥陀仏」	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.81上:7	p.289下03行	〔三宅1986a〕が仏師快慶(?～1227以前)に比定。〔山本2004〕は「仏師快慶にあたる可能性がある」と慎重を期する。なお『報告書』の該当箇所では梵字を翻刻せず「□阿弥陀仏」と記載しており、注意を要する。
「快慶」	11 平学等交名	第4紙表	p.150上:39	p.322上22行	〔伊藤1987〕は、「同名異人」の可能性を断った上で、仏師快慶の可能性を示唆。
「快慶」	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.20下:20	p.262上19行	〔松浦2010b〕は、仏師快慶に比定。
<b>(B) 法然教団の構成員①</b> ——入室同法——					
「信空」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	信空(1146～1228)に比定〔玉山1979・伊藤1987〕。法名で記された源智の父親(平師盛もしくは平資盛)に比定する見解あり〔鬼頭2004〕。
「證空」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	証空(1177～1247)に比定〔玉山1979・伊藤1987〕。同じ「證空」を法名とした平重盛(1138～79)に比定する見解あり〔鬼頭2004〕。
「真観房感西」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:21	p.342上12行	感西(真観房、1153～1200)に確定〔玉山1979・伊藤1987〕。
「欣西」	14 成阿弥陀仏交名 22 入道入蓮等交名	第3紙表 —	p.224下:71 p.264上:1	p.358下8行 p.374上15行	欣西(生没年未詳)の可能性を指摘〔伊藤1983・1987〕。
「寛智」	14 成阿弥陀仏交名	第3紙表	p.224下:71	p.358下08行	逸伝の僧。「寛智 源智 欣西」という連記から、源智との関係を推測〔伊藤1987〕。
<b>(C) 法然教団の構成員②</b> ——有力門弟——					
「幸西」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.102上:22	p.299上19行	幸西(1163～1247)の可能性を指摘〔伊藤1983・1987〕。
「幸西」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.103下:43	p.300上8行	
「幸西」	10 蓮仁等交名	第3紙裏	p.125下:19	p.310下2行	
「幸西」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.201上:59	p.347上8行	
「幸西」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.221上:21	p.356下19行	
「幸西」	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.20下:23	p.262上22行	
「浄西」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.103下:43	p.300上8行	〔伊藤1987〕は、「浄西 幸西」・「浄西・薬師・良快・範尊・幸西」と連記されることから、「幸西系の僧」と推定。
「浄西」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.102上:22	p.299上19行	
「隆寛」	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83上:36	p.290下3行	隆寛(1148～1228)の可能性を指摘〔伊藤1987〕。
「住蓮房」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:23	p.342上14行	住蓮房(?～1207)に確定〔玉山1979〕。
「住蓮」	10 蓮仁等交名	第3紙表	p.120下:12	p.308上15行	住蓮房(?～1207)の可能性を指摘〔伊藤1987〕。
「住蓮」	11 平学等交名	第4紙表	p.150上:41	p.322上25行	
「住蓮」	13 大納言等交名	第2紙表	p.196下:21	p.344下16行	宿蓮房(生没年未詳)の可能性を指摘〔伊藤1983・1987〕。
「宿蓮」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.200下:45	p.346下16行	
「宿蓮」	13 大納言等交名	第2紙表	p.197上:28	p.344下24行	
「宿蓮」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.201上:56	p.347上4行	
「安楽房遵西」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:23	p.342上14行	遵西(?～1207)に確定〔玉山1979・伊藤1987〕。
「善綽房西意」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:24	p.342上14行	西意(生没年未詳)に確定〔伊藤1987〕。『報告書』該当箇所では「善綽房 西意」と二名に分けて翻刻され、『集成』もこれを踏襲するが、〔伊藤1987〕が同一人物として訂正している。
「聖願房」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:24	p.342上15行	性願房(生没年未詳)に比定〔伊藤1987〕。
<b>(D) 法然教団周辺の念仏僧と帰依者</b>					
「良快」	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83上:36	p.290下3行	良快(1185～1242)に比定。「幸西と親しい関係にあつたらしい」〔伊藤1987〕。
「良快」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.102上:22	p.299上19行	
「良遍」	11 平学等交名	第4紙表	p.149上:24	p.321下19行	良遍(1194～1252)に比定〔伊藤1983・1987〕。
「良遍」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.223上:50	p.357下22行	
「明遍」	11 平学等交名	第3紙表	p.143下:38	p.319上16行	明遍(1142～1224)に確定〔伊藤1987〕。
「聖覚」	11 平学等交名	第3紙裏	p.163上:26	p.328下17行	聖覚(1167～1235)に比定〔伊藤1987〕。
「聖覚」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.223上:49	p.357下20行	聖覚(1167～1235)に比定〔伊藤1983〕。

「澄憲」	9 順阿彌陀仏等交名	第2 紙裏	p.101 下 : 16	p.299 上 9 行	澄憲 (1126 ~ 1203) に比定 [伊藤1987]。
「静遍」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.204 上 : 40	p.348 上 22 行	静遍 (1166 ~ 1224) に確定。
「証真」	14 成阿彌陀仏交名	第3 紙表	p.223 上 : 50	p.357 下 22 行	証真 (宝地房、生没年未詳) の可能性を指摘 [伊藤1983・1987]。
「南無阿彌陀仏」	15 橘守利等交名	第3 紙	p.229 下 : 18	p.360 下 14 行	[伊藤1983] は、「同名異人」の可能性を断った上で、俊乘房重源 (1121 ~ 1206) が「南無阿彌陀仏」と号していたことから、「重源の徒が彼の名を書き留めた」可能性を示唆。
「尼聖如」	10 蓮仁等交名	第3 紙表	p.124 上 : 59	p.309 下 10 行	式子内親王 (1149 ~ 1201) の可能性 [伊藤1983・1987]。
「六条尼御前」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.191 上 : 21	p.342 上 11 行	六条尼御前 (法然「没後起請文」等に所見) に確定 [伊藤1987]。重源の『南無阿彌陀仏作善集』にも所見 [大橋2004]。
「レムセイ」	13 大納言殿等交名	第1 紙裏	p.205 上 : 64	p.349 上 5 行	熊谷直実 (蓮生、1141 ~ 1208) に比定 [伊藤1983・1987]。後掲 (K) も参照のこと。
「漆末宗」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.198 下 : 7	p.345 下 15 行	法然の出身氏族である漆 (漆間) 一族に属する、在京の法然外護者の可能性 [伊藤1986b・大橋2004]。
「漆守恒」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.198 下 : 7	p.345 下 15 行	
(E) 宮廷・将軍家とその周辺					
「尊成」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 下 : 1	p.337 上 9 行	後鳥羽院 (1180 ~ 1239) に確定 [玉山1979]。
「新院」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 下 : 1	p.337 上 9 行	土御門院 (1196 ~ 1231) に確定 [玉山1979]。
「当君」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 下 : 1	p.337 上 9 行	順徳天皇 (1197 ~ 1242) に確定 [伊藤1981b]。納入品発見当初は高倉天皇 (1161 ~ 81) ともされた [玉山1979]。
「公継」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 下 : 1	p.337 上 9 行	徳大寺公継 (1175 ~ 1227、造像当時は右大臣) に比定 [伊藤1987ほか]。『報告書』『集成』とも「公経」と翻刻しているため、西園寺公経 (1171 ~ 1244、造像当時は大納言・春宮大夫) として記述する文献が散見されるが、「公継」が正しい。【表1】も参照のこと。
「法性寺入道殿下」	12 源頼朝等交名	第2 紙裏	p.191 下 : 24	p.342 上 15 行	藤原兼実 (1149 ~ 1207) に確定 [伊藤1981]。
「座主大僧正慈円」	12 源頼朝等交名	第2 紙裏	p.191 上 : 24	p.342 上 15 行	慈円 (1155 ~ 1225) に確定 [玉山1979]。
「法印成円」	12 源頼朝等交名	第2 紙裏	p.191 上 : 24	p.342 上 15 行	成円 (生没年未詳) に確定 [伊藤1987]。
「春花門院」	12 源頼朝等交名	第2 紙裏	p.191 上 : 18	p.342 上 7 行	春華門院 (昇子内親王、1195 ~ 1211) に確定 [伊藤1987]。九条兼実の娘で後鳥羽院皇女。
「春花門あん」	25 念仏供養札等一括	(一)	p.265 下 : 22	p.375 上 1 行	
「源雅通」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 下 : 16	p.347 下 13 行	源雅通 (1118 ~ 75) に確定 [伊藤1987]。
「源通親」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.200 上 : 35	p.346 下 1 行	源通親 (1149 ~ 1202) に確定 [伊藤1987]。
「源通親」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.203 下 : 35	p.348 上 14 行	
「源通資」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 下 : 16	p.347 下 13 行	源通資 (? ~ 1205) に確定 [伊藤1987]。
「ソツノ三位殿」	2 平季村等百万遍人衆	—	p.17 下	p.261 上	吉田経房 (1142 ~ 1200) に比定 [峰岸1995]。
「頼朝」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 上 : 1	p.337 上 9 行	源頼朝 (1147 ~ 99) に確定 [玉山1979]。
「大納言三位殿」	2 平季村等百万遍人衆	—	p.17 下	p.261 上	源頼朝 (1147 ~ 99) に比定 [峰岸1995]。
「頼家」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 上 : 1	p.337 上 9 行	源頼家 (1182 ~ 1204) に確定 [玉山1979]。
「二位入道頼家」	12 源頼朝等交名	第2 紙裏	p.191 上 : 17	p.342 上 7 行	
「実朝」	12 源頼朝等交名	第1 紙表	p.180 上 : 01	p.337 上 09 行	源実朝 (1192 ~ 1219) に確定 [玉山1979]。
「頼朝姫御前」	12 源頼朝等交名	第2 紙裏	p.191 上 : 17	p.342 上 06 行	大姫 (1178 ~ 97) に比定 [伊藤1987]。
「源範頼」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.201 下 : 65	p.347 上 16 行	源範頼 (1156 ~ 93) に確定 [伊藤1987]。
「源義経」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.201 下 : 65	p.347 上 16 行	源義経 (1159 ~ 89) に確定 [伊藤1987]。
(F) 源智の俗縁に関して①——父方：平家の人々——					
「平宗盛」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.201 下 : 66	p.347 上 17 行	平宗盛 (1147 ~ 85) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「平宗守」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.205 上 : 65	p.349 上 6 行	「平宗盛」の宛字 [伊藤1983・1987]。
「平知盛」	13 大納言等交名	第2 紙裏	p.201 下 : 66	p.347 上 18 行	平知盛 (1152 ~ 85) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「重衡」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.201 下 : 1	p.347 上 20 行	平重衡 (1157 ~ 85) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「平重平」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.205 上 : 65	p.349 上 6 行	「平重衡」の宛字 [伊藤1983・1987]。
「平資盛」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.201 下 : 1	p.347 上 20 行	平資盛 (1158or61 ~ 85) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「平惟盛」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.201 下 : 1	p.347 上 20 行	平惟盛 (1160 ~ 84) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「平教盛」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 上 : 2	p.347 上 22 行	平教盛 (1128 ~ 85) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「平経盛」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 上 : 2	p.347 上 22 行	平経盛 (1124 ~ 85) と確定 [伊藤1981・1983・1987]。
「平通盛」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 上 : 2	p.347 上 22 行	平通盛 (1153 ~ 84) と確定 [伊藤1983・1987]。
「経正」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 上 : 2	p.347 上 22 行	平経正 (? ~ 1184) と確定 [伊藤1983・1987]。
「平保盛」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.202 上 : 2	p.347 上 22 行	平保盛 (1157 ~ 1233?) と確定 [伊藤1981・1987]。
「平師守」	13 大納言等交名	第1 紙裏	p.205 上 : 65	p.349 上 5 行	平師盛 (1169or71 ~ 84) の宛字 [伊藤1983・1987]。

「平重守」	13 大納言等交名	第1紙裏	p.205上:65	p.349上6行	平重盛(1138~79)の宛字 [伊藤1983・1987]。
「平清守」	13 大納言等交名	第1紙裏	p.205上:65	p.349上6行	平清盛(1118~81)の宛字 [伊藤1983・1987]。
「平大納言殿」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:18	p.342上8行	平時忠(1130~89)に比定 [伊藤1987]。
「平時家」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:18	p.342上7行	平時家(?~1193)に比定 [伊藤1987]。
「平時家」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:19	p.342上9行	
<b>(G) 源智の俗縁に関して②——母方の俗縁の可能性に関して:秘妙の周辺と石清水八幡宮の人びと——</b>					
「秘妙等親類」	1 源智造立願文	—	p.17上	p.260下	[伊藤1981]は「おそらく源智と秘妙とは兄妹(または姉弟)なのであろう」とする。
「比丘尼秘妙」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:22	p.342上12行	[伊藤1983]は「推定の域を出ないが、母とみた方がよりよいのではないかと思う」とする。
「秘妙」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.190下:13	p.342上2行	[野村1985]は、源智の配偶者である可能性を考慮すべきとする。
「秘妙」	13 大納言等交名	第1紙裏	p.205上:64	p.349上5行	[伊藤1986a]は「この親縁関係は(中略)ともかく(源智の)母方のものであることは疑えない」とする。 [伊藤1987]は「[秘妙等親類]というのは秘妙らの親族という意味で源智の親族を意味しないかもしれない」とする。
「静妙」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:22	p.342上12行	[伊藤1981]は「名前からみて秘妙と関係がある人物と思われる」と述べる。
「静妙」	13 大納言等交名	第1紙裏	p.205上:64	p.349上5行	[伊藤1983]は「秘妙を母、静妙をおぼともみることができる」「ことによると静妙は源智の乳母であったかもしれない」と述べる。
「秘妙房母大夫殿」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	[伊藤1983]は、「秘妙を源智の姉または妹とすれば、その母『秘妙房母大夫殿』は源智にとっても母ということになる」とする。 [野村1985]は、成清(石清水八幡宮第30代権別当、1122~99)の娘の一人で、葉室光親(1176~1221)の室とする。 [梶村1993]は、[野村1985]を承けつつ、葉室光親の室ではなく、「成清の最年長の姉、もしくは、成清の息子の嫁であったかも知れない」とする。 [吉良ほか1997・1998]は、建礼門院右京大夫(1157?~?)に比定し、源智の母とする見解を提示している。
「祐清」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:24	p.342上15行	祐清(1166~1221)に確定 [野村1985b]。
「幸清」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:24	p.342上16行	幸清(1177~1235)に確定 [野村1985b]。
「超清」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	超清(1198~1236)に確定 [野村1985b]。
「シウ清」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	秀清(1190or93~1207or08)に確定 [野村1985b]。
<b>(I) 個別人物名比定の試み、その他</b>					
「禪覚」	11 平学等交名	第2紙表	p.136下:20	p.315下15行	[吉良2007]は禪覚(『三僧記類聚』の撰者)に比定。
「蓮光」	11 平学等交名	第2紙表	p.138上:39	p.316上25行	[吉良2007]は菩提山正磨寺僧の蓮光上人(蓮光房)に比定。なお蓮光房については[杉崎2010]を参照。
「心蓮」	11 平学等交名	第2紙表	p.138下:44	p.316下8行	[吉良2007]は「迎接院牙舎利縁起」にみえる「心蓮房」に比定。
「覚阿弥陀仏」	7 百万遍念仏衆注進帳	第21丁左	p.58下:21	p.280上8行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.80下:1	p.289上16行	[吉良2007]は、「このように(中略)類出することは、彼が念仏聖のリーダーであったことを示唆する」と解し、いずれも同一人物とみて、覚阿弥陀仏を「公卿であった藤原俊盛の出家の姿」とする。
	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.82下:30	p.290上15行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.85上:64	p.291下1行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.85下:66	p.291下4行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.85下:5	p.291下15行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.87上:23	p.292上24行	
「観音房」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.87上:25	p.292下1行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.87下:32	p.292下14行	
	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.81下:15	p.289下16行	[吉良2006]はいずれも同一人物と解し、胡宮神社蔵「仏舎利相承系図」にみえる「観音房(主馬判官盛国子息也/号南無仏)」に比定、法然の門弟とみる。
	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.82上:22	p.290上1行	
「南無仏」	9 順阿弥陀仏等名	第2紙裏	p.100下:4	p.298下13行	
「南無仏」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.101下:15	p.299上6行	
「南無仏」	11 平学等交名	第3紙表	p.141下:8	p.318上6行	
「盛尊」	14 成阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.206上:7	p.349上21行	[吉良2006]は同一人物と解し、胡宮神社蔵「仏舎利相承系図」にみえる禅花房盛尊に比定する。
「そうしやうそん」	7 百万遍念仏衆注進帳	第5丁左	p.44上:1	p.273上24行	
「妙月」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	[稲田1997]は、尾張局の法名とみる。
「源氏」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191下:25	p.342上16行	[稲田1997]は、「證空の実父、源通親」に比定する。
「紀為末」	10 蓮仁等交名	第2紙表	p.117上:31	p.306下13行	[野村1988]は、清淨華院文書にみえる紀為末、日野氏系図にみえる行命に比定。
「行命」	10 蓮仁等交名	第2紙表	p.117上:31	p.306下13行	
<b>(J) 列島諸地域の人びと①——「エゾの交名」をめぐって——</b> *これに関する論及はきわめて多いため、本表では一部にとどめる。					
「きみこ」(=吉弥侯)	8をみのさたつね等交名帳	第17丁左	p.78下:14	p.288上21行	この交名帳は末尾に「エゾ三百七十人」とあることから「エゾの交名」と呼ばれ、北方地域史・アイヌ史からも注目されている。
「ををとり」(=大鳥)	8をみのさたつね等交名帳	第18丁左	p.79下:11	p.288下20行	ここでは[伊藤1987]が「陸奥、出羽に分布」する氏族の姓として列挙するものを掲げる。
「ととり」(=鳥取)	8をみのさたつね等交名帳	第7丁右	p.66下:6	p.283上11行	
「しけの」(=滋野)	8をみのさたつね等交名帳	第3丁左	p.62上:15	p.281下1行	
「あへ」(=安倍)	8をみのさたつね等交名帳	第3丁右	p.61上:9	p.281上8行	
「たちは」(=立羽)	8をみのさたつね等交名帳	第18丁左	p.79下:13	p.288下23行	

「ひのと」 (= 日戸)	8をみのさたつね等交名帳	第18丁左	p.79下:12	p.288下21行	
「ひろと」 (= 広戸)	8をみのさたつね等交名帳	第18丁左	p.79下:10	p.288下14行	
「ををと」 (= 大戸)	8をみのさたつね等交名帳	第10丁左	p.70下:1	p.288下15行	
「あんとう」	8をみのさたつね等交名帳	第17丁左	p.78上:8	p.288上15行	[大石1986]は「津軽安藤氏とは別の北奥羽の土着の人であろう」とする。
<b>(K) 列島諸地域の人びと②——関東の武士たち：武蔵七党・千葉氏ほか——</b>					
「平季村」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.260下	萱間左衛門尉季村(野与党)に比定 [峰岸1995]。
「平経季」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	大蔵中務丞経季(野与党)に比定 [峰岸1995]。
「平有光」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	洪江四郎有光(野与党)に比定 [峰岸1995]。
「平光衡」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	八条五郎光平(野与党)に比定 [峰岸1995]。なお「集成」は「光衡」と翻刻する。
「僧正善□」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.260下	箕句二郎為経(野与党)に比定、「□」は「房」とする [峰岸1995]。なお「集成」は「僧正善」と翻刻する。
「為経仲九郎」		—			
「隆範」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	「念仏衆の物故者であろう」 [峰岸1995]。
「信真」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	「念仏衆の物故者であろう」 [峰岸1995]。
「丹治実直」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	青木丹五実直(丹党、実村の父)に比定 [峰岸1995]。
「丹治実村」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.260下	青木左衛門尉実村(丹党、実直の子)に比定 [峰岸1995]。
「菅原頼経」	2平季村等百万遍人衆	—	p.17下	p.261上	[峰岸1995]は、「未確認」だが「私市党であろうか」とする。
「小野家綱」	13大納言殿等交名	第1紙表	p.192下:4	p.343上2行	内島七郎家経(猪俣党)に比定 [峰岸1995]。
「小野盛忠」	13大納言殿等交名	第1紙表	p.192下:4	p.343上2行	内島二郎兵衛尉盛忠(猪俣党)に比定 [峰岸1995]。
「井ノマタ弥三郎」	13大納言殿等交名	第1紙表	p.192下:5	p.343上2行	猪俣弥三郎兼季(猪俣党)に比定 [峰岸1995]。
「ヲ、ツカノ藤三郎」	13大納言殿等交名	第1紙表	p.192下:5	p.343上3行	埼玉県熊谷市大塚ゆかりの人物に比定 [峰岸1995]。
「アマカスノヤシ」	13大納言殿等交名	第1紙表	p.192下:5	p.343上3行	甘糟野二郎忠行(猪俣党)に比定 [峰岸1995]。
「ミカシリ三郎」	13大納言殿等交名	第1紙表	p.193上:5	p.343上3行	埼玉県熊谷市三ヶ尻ゆかりの人物に比定 [峰岸1995]。
「平胤政」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下3行	千葉胤正(1141?~1203?、常胤の嫡子)に比定 [峰岸1995]。
「得阿弥陀仏」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下3行	千葉胤常(1137~1204、常胤の庶子、「念仏行者」と称された)に比定 [峰岸1995]。
「寛秀」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下3行	葛飾郡栗原郷(千葉県船橋市)に居住した栗原禅師こと寛秀(千葉胤正の庶子)に比定 [峰岸1995]。
「平常秀」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下3行	承久2年(1220)に龍角寺を再興したという千葉常秀(胤正の庶子)に比定 [峰岸1995]。
「平成胤」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下3行	千葉成胤(胤正の嫡子)に比定 [峰岸1995]。
「平胤忠」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下3行	千葉胤忠(常胤の孫)に比定 [峰岸1995]。
「平胤重」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:63	p.305下4行	千葉胤重(常胤の曾孫)に比定 [峰岸1995]。
「平胤義」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.115上:66	p.305下8行	千葉胤義(胤正の孫)に比定 [峰岸1995]。
「平胤秀」	10蓮仁等交名	第1紙表	p.114下:64	p.305下6行	大須賀胤秀(千葉常胤の孫)に比定 [峰岸1995]。
「師常」	14成阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.211上:67	p.351下21行	相馬師常(千葉常胤の子)に比定 [野口1996]。
「平行常」	14成阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.211上:67	p.351下21行	相馬行常(相馬師常の子)に比定 [野口1996]。
「レムセイ」	13大納言殿等交名	第1紙裏	p.205上:64	p.349上5行	熊谷直実(蓮生、1141~1208)に比定 [伊藤1983・1987]。前掲(D)も参照のこと。
<b>(L) 列島諸地域の人びと③——伊勢国周辺——</b>					
「荒木田泰長」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.87下:28	p.292下8行	[伊藤1987]は、本像の納入品に「土地に特有な姓の名が集中的にみられる箇所があり、「その地域を察することができる」として、東海地方に関して渡会氏と荒木田氏を提示。
「度会貞教」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.87下:30	p.292下10行	[大橋2004]は、「鎌倉初期までは古代社会の影響を多分に受け古代からの姓が(列島各地の諸地域に)散在していた」と述べ、「このことは伊勢国でもいえる」として、「伊勢神宮に奉仕した彌宜一族荒木田・渡(ママ)会」をはじめ、9「順阿弥陀仏交名」での所見を列記する(左の一覧のとおり)。なおこのほか「三人部」も挙げるが、その表記で記された姓を有する人物名は見当たらない。また「部のつく姓が多いことも、伊勢国での勧進の結果とみることができよう」と述べる。
「大中臣通能」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.87下:29	p.292下9行	
「宮主守弘」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第2紙裏	p.101下:15	p.290上6行	
「大江貞清」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83上:38	p.290下6行	
「藤井守貞」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.94上:49	p.295下8行	
「惟宗康時」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.86上:9	p.291下3行	
「宗我部武足」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83上:37	p.290下4行	
「身人部宗光」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第3紙裏	p.96下:16	p.296下12行	
「倉橋部延貞」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第3紙裏	p.97上:21	p.296下25行	
「イムフク部友弘」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第3紙裏	p.96下:13	p.296下12行	
「雀部八郎丸」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.88上:33	p.292下16行	
「草加部顕之」	9順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83上:37	p.290下5行	
「小坂部友末」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83下:42	p.290下12行	
「五百部國安」ほか	9順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.83下:43	p.290下15行	
<b>(M) 列島諸地域の人びと④——北陸地域：「越中国百万遍勤修人名」を中心に——</b>					
「越前國蓮坐上人」	10蓮仁等交名	第3紙裏	p.125下:19	p.310下2行	[伊藤1987]は、所縁の国名を明記する数少ない人名として挙げ、「幸西・珍宝」について記されることから「一念義が北陸に盛んであったことと関係があらう」とみる。

「越中上座堅者」	6 越中国百万遍勤修人名	第2紙裏	p.35上:4	p.269上14行	本納入品中で、国名を明記する数少ない人名 [伊藤1987]。『集成』は「堅物」とするが、誤植か。
「射水恒忠」ほか	6 越中国百万遍勤修人名	第2紙表	p.23下:20	p.263下22行	[久保1983]は、「越中古代氏族に由来すると思われる氏名」とする。
「砥波氏」(利波氏)ほか	6 越中国百万遍勤修人名	第3紙表	p.26下:6	p.265上13行	
「三嶋貞包」ほか	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.22上:56	p.263上13行	
「清原共則」ほか	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.22上:54	p.263上11行	[久保1983]は、「国衙在庁官人に由来する士豪層と思われる」人物とする。
「宮道忠式」ほか	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.22上:55	p.263上12行	
「宮道式宗」	6 越中国百万遍勤修人名	第2紙表	p.23上:8	p.263下7行	[久保1983]は、『寛永諸家系譜』に太田氏の祖として同名の人物があり、12世紀後半の人物にあたることを指摘する。
「永海」	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.20上:15	p.262上12行	[久保1985a]は、黒部市西徳寺・魚津市西願寺の開祖と伝える「栄海」との音通から、同一人の可能性を指摘する。
<b>(N) 列島諸地域の人びと⑤—近江地域：野洲周辺—</b>					
「江部氏女」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.200下:48	p.346下20行	[大谷1987]は『野洲町史』のなかで、「野洲地域に関して次のような姓名を見いだすことができる」として挙げている。また「祇徳丸」にも着目しつつ、「江部氏女」「女祇王」を「平家物語」に登場し野洲地域に伝承を残す「祇王」その人であろう」と述べる。ただし[古川1991]は「(祇王は)固有名詞とは考え難い」とし、[細川1995]もこの見方に賛同している。
「大谷氏」(2名)	14 成阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.211上:73	p.352上6行	
「三宅氏」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.220上:6	p.356上22行	
「三宅則道」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙表	p.225上:73	p.358下10行	
「ヲキナカノ氏」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙裏	p.227上:10	p.359下5行	
「ヲキ長ノ清貞」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙裏	p.227上:10	p.359下5行	
「ヲキナカノ氏」	14 成阿弥陀仏等交名	第3紙裏	p.227上:12	p.359下9行	
「女祇王」	14 成阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.212下:1	p.352下17行	
「祇徳丸」	14 成阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.213上:08	p.353上6行	
<b>(O) 列島諸地域の人びと⑥—吉備地域—</b>					
「倭父(文カ)利包」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.111下:23	p.304上2行	[伊藤1986b]は「吉備の古代氏姓」を主題とし、本像の交名のなかで10「蓮仁等交名」に、法然の父方の氏族である漆氏の姓名が集中して所見することを指摘、また宍人氏、上道氏、吉備国守、下道氏、笠氏、海氏、倭文氏、和気氏、新見氏、吉備氏、そして法然の母方の氏族である秦氏の人物名の所見を述べ、「当地方に限っていえば現地有力氏族が勸進対象の主体となっている」と論じる。[大橋2004]は、10「蓮仁等交名」の第1紙・第2紙にみえる、吉備地方の古代以来の氏姓に着目し、姓ごとに列記する(左の一覧のとおり)。「同じ吉備地方でも備後国の人は見当たらない」として、「法然上人の命を受けたその名は知ることができないにしても備前・備中・美作にかけて布教した人がおり、交名はその成果であったとみてよい」と述べる。なお[伊藤1986b]がとりあげた海氏・吉備氏についての論及はない。
「弓削貞國」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.113上:40	p.304下12行	
「秦宗清」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.109下:2	p.303上5行	
「漆善哉」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.110上:6	p.303上12行	
「新見助時」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.110上:8	p.303上16行	
「大中臣國任」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.110下:11	p.303上23行	
「土師忠平」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.109下:3	p.303上8行	
「上道久友」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.109下:4	p.303上7行	
「宍人依安」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.111上:17	p.303下12行	
「笠包末」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.112上:27	p.304上11行	
「和気盛村」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.110上:7	p.303上14行	
「藤井犬子」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.109下:1	p.303上2行	
「吉井重包」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.109下:4	p.303上8行	
「矢田部重貞」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.113上:41	p.304下15行	
「出雲成元」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.110上:9	p.303上19行	
「丹治友宗」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.113上:40	p.304下13行	
「賀野成恒」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.111下:24	p.304上4行	
「刑部國正」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.112下:32	p.304上20行	
「下道國貞」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.111上:17	p.303下22行	
「海家永」ほか	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.110下:12	p.303上25行	[漆間氏と並ぶ美作の名族] [伊藤1986b]。
「吉備国守」	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.111上:15	p.303下7行	[伊藤1986b]参照。
「宍人諸平」	10 蓮仁等交名	第1紙表	p.111上:18	p.303下16行	[伊藤1986b]は、高野神社(津山市)随神像の応保2年(1162)墨書銘にみえる「祝詞宍人諸貞」と「親縁関係がありそう」と推測する。
<b>(P) 列島諸地域の人びと⑦—四国地域：讃岐国を中心に—</b>					
「凡行遠」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130下:15	p.312下24行	[大橋2004]は、古代以来の「讃岐国における特異な姓」をもつ人物名として、11の「平学等交名」の第1紙表における所見を列挙し(遺漏も散見される)、「凡・綾・佐伯・鴨部・越智を名乗る人が、これほど多くまとまっているところがない」として、「讃岐国での勸進による交名とみてよい」とする。また、本交名にみえる「凡海」「西凡」「凡早」「凡部」姓の人物も「凡氏の流れをくむ人」とし、「八鳥」「粟」「文」「宇治部」「日置」の姓も「多くみられる」と述べる。
「讃岐守弘」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.132下:43	p.313下21行	
「鴨部成弘」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.132上:38	p.313下12行	
「賀茂宗正」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130上:16	p.313上25行	
「秦貞守」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130下:15	p.312下24行	
「綾守貞」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130下:17	p.313上2行	
「丸部国重」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.134上:59	p.314上23行	
「佐伯貞包」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130上:11	p.312下17行	
「菊田武依」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130上:11	p.312下18行	
「越智為貞」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.130下:14	p.312下22行	
「櫻井安光」ほか	11 平学等交名	第1紙表	p.133上:45	p.313下24行	
<b>(Q) 列島諸地域の人びと⑧—九州地域：宇佐を中心に—</b>					
「宇佐大子」	11 平学等交名	第4紙裏	p.154下:12	p.324下1行	[櫻井2004]は「太子」とし、宇佐貞時(宇佐宮神職)の娘に比定。
「宇佐三子」	11 平学等交名	第4紙裏	p.153下:3	p.324上7行	[櫻井2004]は宇佐宮縫殿職にあった人物に比定。
		第4紙裏	p.154下:13	p.324下3行	
「田部太子」	11 平学等交名	第4紙裏	p.154上:9	p.324上21行	[櫻井2004]は「田部太子」とし、豊前国山国吉富等の地頭職にあった人物に比定。
「田部大子」	11 平学等交名	第4紙裏	p.154上:11	p.324上24行	

「神傳」	11 平学等交名	第4紙裏	p.154上:10	p.324上23行	「櫻井2004」は「神の字を僧名につけた者」「宇佐宮弥勒寺の僧侶とみられる」と述べる。
「神成」	11 平学等交名	第4紙裏	p.154上:10	p.324上23行	
「大友氏女」	9 順阿弥陀仏等交名	第1紙表	p.84上:46	p.290下19行	「櫻井2004」は、豊後国守護大友氏による一遍への帰依を述べるなかでこの結縁者名にふれる。
(R) 結縁者の種々相——社会の諸階層にわたる人びと——					
「にしの御方」	25 念仏供養札 (一)	—	p.266上:40	p.375上10行	「西御方」。「貴族の女房」[伊藤1987]。
「新宰相局」	13 大納言等交名	第1紙裏	p.201下:1	p.347上20行	「貴族の女房」として例示 [伊藤1987]。
「大中納言御局」	12 源頼朝等交名	第2紙裏	p.191上:18	p.342上8行	
「一条局」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.201下:65	p.347上16行	
「美作局」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.200上:35	p.346下2行	
「伯耆局」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.200上:35	p.346下2行	
「丹波局母」	13 大納言等交名	第2紙裏	p.201下:66	p.347上17行	
「嵯峨御乳人」	9 順阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.86下:13	p.292上6行	
「内舎人源行景」	14 成阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.217下:69	p.355上17行	「中・下級官人」の人物名として例示 [伊藤1987]。
「右衛門尉藤原頼言」	14 成阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.217下:69	p.355上16行	
「左衛門尉藤原基貞」	14 成阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.217下:69	p.355上16行	
「与丁秦清真」	16 念仏進状	第5紙	p.241上:15	p.365上12行	
「手小・石王・犬・若茶・王・乙(中略)乙王・諸犬・滝・美乃・アア・イチ・乙弥・万才・福王」	13 大納言殿等交名	第1紙表	p.194下:36	p.343下17行	「白拍子・遊女らしい人名」の人物名として例示 [伊藤1987]。
「乙弥・万才・福王」	13 大納言殿等交名	第2紙裏	p.200上:34	p.346上25行	上記末尾3名と同名の箇所と指摘 [伊藤1987]。
「ケサ御前」	17 源氏等交名	第2紙	p.244上:1	p.366下2行	「この種の(白拍子・遊女らしい)女性」の人物名として例示 [伊藤1987]。
「女祇王」	14 成阿弥陀仏等交名	第2紙表	p.212下:1	p.352下17行	
「盲僧良慶」	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.21上:35	p.262下12行	[平1994]が「身障者」の人物名として例示。なお第1紙表には近接する箇所に「盲僧佛性」「盲僧延良」の名もみえる(それぞれ「報告書」p.21上:36およびp.22上:48)。
「盲僧覚妙」	6 越中国百万遍勤修人名	第1紙表	p.22上:48	p.263上4行	
「カタヒノ仲安」	6 越中国百万遍勤修人名	第3紙表	p.30上:56	p.266下21行	
「七郎奴」	15 橋守利等交名	第9紙	p.234下:10	p.362下10行	[伊藤1987]が「下層民」の人物名として例示。
「三郎奴」	15 橋守利等交名	第9紙	p.234下:10	p.362下10行	
「犬奴」	6 越中国百万遍勤修人名	第3紙表	p.30下:63	p.267上8行	[伊藤1987]が「一見して下人とみられる人物」として例示。
「次郎奴」	6 越中国百万遍勤修人名	第3紙表	p.30下:64	p.267上8行	

【備考】

- (1) [柴田1986a]は、結縁交名研究の先駆的業績(「結縁交名の二万名」[『中村直勝著作集』5、淡交社、1978年)、初出=1959年)を踏まえつつ、本納入品における人名表記の諸相を論じ、そのなかで「犬とか熊とかの名を単独に、又は他の名と併せて称せられているのは、特に奴隸的な身分を表すものであろうか」と述べている。
- (2) [三宅1986b]は、「彫刻史関係でも、運慶、快慶、湛慶などきわめて興味深い名が散見する」ことを指摘しつつ、「これらは同じ名が何箇所かにあらわれることもあり、ただちに著名な仏師である彼らと同一人であるとは決めかねる」と断り、それらが所見する箇所はあえて記していない。
- (3) [副島1987]は、保寧寺(埼玉県)阿弥陀三尊像を建久7年(1196)に制作した仏師宗慶に関して、「この時代、宗慶を名のる者の事蹟が諸史料に散見する。(中略)僧としての立場で登場する場合が多く、おそらく同名異人と見るべきであろうが、多少の可能性が考えられるものを註に記す」とした上で、その6件のうちに本像の結縁交名を掲げる(所見箇所は記していない)。
- (4) [平1994]は、地域史的観点から本像の結縁交名に関し総合的な論述をおこなった成果として、[伊藤1987]・[大橋2004]とともに研究史上特筆される。「玉桂寺阿弥陀如来立像胎内文書」にみえる主な姓・「エゾ交名」にみえる姓」として統計的な調査結果も表で提示しているが、紙幅の制約から所見箇所が註記されていないためもあり、その内訳の一つ一つを確認することは難しい。この【表3】でもそのすべてを反映しきれていないため、参照をお願いしたい(福井県文書館HPでWEB上での閲覧も可能である)。
- (5) [伊藤1998]は、「エゾの交名」と通称される「をみのさたつね等交名帳」に多くの「いぬ」「～いぬ」という人名表記がみられることに着目し、「『いぬ』『某いぬ』をコシャマインなど同タイプの人名表記と解釈する可能性があると思われる」とする。
- (6) [奥2003]は、建長元年(1249)のケルン東アジア美術館の地藏菩薩立像(康門作)像内納入品中の短冊形摺紙背の結縁交名(138名)の詳細を報告し、「専修念仏者とみられる名が多数認められる」ことを指摘する。そして本像の結縁交名のうちに、同一名として「西蓮、賢海、忠円、定真、璋円、良耀、教印、西円、定円、定善、顕性、尊蓮、迎蓮、理賢、定慶、西信、寛禪、聖覚、行円、聖蓮、實祐、藤原長清、實暁の名が見だせる」ことを指摘している(所見箇所は記していない)。
- (7) [大橋2004]は、地域的な分布をみせる姓に関し北陸地域についても「越中国百万遍勤修人名」に関して論及し、「他にあまり見られない姓」として「宮道・安部・三国・能登・射水・車持・大崎・百済・大宅(大家)・玉作・商長・息長など」を列挙し、また『和名類聚抄』に郡名として見えるものとして「車持・射水・鳥取など」を、「古代から在住していた人」として「射水部・物部部・日置(部)・鳥取(部)」を挙げている。しかしその所見箇所は明示されておらず、再検を尽くすことが難しいため、本表への反映は控えた。